

## 多摩森林科学園における今後の研究の推進と普及・広報活動

多摩森林科学園長 田畑勝洋

20世紀の科学技術の方向は、バイオテクノロジー等のメガサイエンスを狙った物理化学の時代といえるが、近年、国民の価値観は自然とのふれあいやゆとりを重視する、いふならば自然環境との調和による暮らしの質的向上や精神的充足等の方向へ変化してきている。よって、自然科学や社会科学等の発展をも目指したものが、来る21世紀の科学技術の方向になると考えられる。森林についていえば、国土の保全、水資源涵養等の公益的機能の発揮に対する国民の要請がより一層高まる中で、これからは森林の多様な役割と営みについて学び理解する森林環境教育の推進と、環境との調和や資源の循環利用技術の重要性を探究することが国民の期待に沿う最も肝要なことであるといえる。



「国民一人一人が生涯を通じて森林との多様で豊かなかかわりあいを持ち、美しく健全な森林を次代に引き継いでいく森林文化を創造し、新たな社会の構築に寄与する」とした中央森林審議会の提案はまさしく21世紀の森林の新たな利用方向を打ち出したものである。

多摩森林科学園では、先に示した森林の持つ意義を先取りし、平成6年度に科学園独自の研究課題「首都圏地域の島状森林生態系の保全及び教育的活用技術の高度化」をたて、これまで推進してきたところである。特に森林生態系の教育的活用技術の高度化に関する研究は、今後の多摩森林科学園の担う重要な研究課題として位置づけており、専門分野と連携協力を図りつつ、計画的に推進せねばならないと考えている。

サクラの遺伝子保存林と樹木園等の有料一般公開も本年度で7年目を迎えた。サクラの開化最盛期の4月期週末は天候に左右され、毎年入園者数は大きく増減する。とはいえ、年間の入園者数はこれまで7万人を下ることはない。最近では、サクラの開花期以外の時期でも徐々に樹木園や試験林への入園者数が増加してきている。5月以降の新緑の時期に加え、約1,000株のヤマユリの開花期、秋の紅葉時には、多くの方々に首都圏の癒しの森の機能を十分味わっていただいている。今後さらに、より活発な普及・広報活動を展開してゆかねばならないと考えている。それには(財)林業科学技術振興所等関連機関と町内会をはじめとする地域の協力が極めて重要であることはいままでもない。

多摩森林科学園は、大正10年11月に宮内省皇室林野局林業試験場として発足して以来、来る2001年11月には創立80周年を迎えることとなる。これからも森林環境教育の場として、国民に森林総合研究所の主たる研究成果を展示し、分かりやすく理解していただくとともに、毎年数十回の森林講座・森林教室を開催し、開かれた研究所として社会の期待に応えられるようより一層努力する所存である。今後とも格段のご支援・ご協力をお願いしたい。